

調査日 森林組合連合会 4月6日

出品量は500<sup>m</sup>程度で、県森連自体が、共販より渋川の国産材加工センター及び、直送販売に重心を置いている為、原木市場は販売部門の一角を占めるに過ぎない形となっている。

出材の内容は、スギの3.0m柱材を中心に、ヒノキとその他といった所だ。まとまった量が出材され、買い方側から見て目当てになるのは、スギの3.0m材だけだが、ヒノキの土台角用の丸太がひっ迫している様だ。

しかし県森連の市では、余りにも量が少なく、買い方にしてみれば、あまり当てにはできない量だ。今回1物件だけ”径級”と材積が満足される物があったがこれは25,500<sup>円</sup>/<sub>m</sub>を超える値が付き、2番札単価及び応札枚数も多く、この価格が一過性でなく、適正である事を示している。

造材を見渡すと、やはり大量消月分

の傾向が強く、その結果3.0mの径級が太すぎる所に及んでいると思われる。

4.0m材が少ない。

調査日 素材生産協同組合 4月27日

出品量は1,000<sup>m</sup>ほどで、県森連との性格の違いが現れている。

こちらは市売りが主体で、素材生産業者が持ち寄る所から、出材内容には材種・採材方法共に幅がある。需要傾向を探るには待ち幅が広いに越した事はないので、大いに参考になる。

県森連との違いはスギの4.0m材が多かった事。

この日はたまたまスギの大径木の入荷があったので、4.0mの件数が多かったが中目材も出品されており、価格も悪くない。

元々角材用の丸太は、1本の木から1本しか取らないため素材が太くても細くても製品価格は同じになる。更に太い原木は芯に近い所で製品を取るため品質が下がり、無駄に材積が多くなるため、一定以上の太さは、3.0mの角材用には好まれないとされてきたが、利用方法の変化（製材の自動化）と共に太めの材が好まれる様になってきた。

4.0mの中目材も用途が変わってきて、板材や小角用であったものから、様々に変化している。更に3.0m材が立てて使う材にしか使えないののに対して4.0m材は2.0m材としても使えて汎用性がある。

今2.0m材は主にバイオ燃料として利用されているが、合板下地としても需要が高まってきている。素生協の出材の中に、2.0m中目材が多く見受けられるのもこの需要であろう。

カラマツの4.0mは25,000<sup>円</sup>/<sub>m</sub>を越え、今は貴重品の様相である。